

地域との連携を深めるために



株式会社TYK 会長
牛込 進 氏



株式会社十八楼 女将
伊藤 知子 氏



岐阜県農業協同組合中央会 会長
ぎふ農業協同組合 代表理事・組合長
櫻井 宏 氏



岐阜大学 学長
森脇 久隆

森脇学長と外部有識者との対談集 [2]



岐阜大学の将来ビジョン(森脇ビジョン)
イメージ図

国立大学は2004年に国立大学法人となり、以来、6年を一つの期間として改革を進めてきました。第1期は2004年から、第2期は2010年から、第3期は2016年4月から始まっています。この6年間の計画、また、2025年問題に向けての10年先を見据えた計画を、この「岐阜大学の将来ビジョン(森脇ビジョン)」に示しております。

岐阜大学の将来ビジョン(森脇ビジョン)に示した5つの様々な戦略(教育、研究、社会貢献、国際化、大学病院)での取組について、学外の有識者の方々と対談いたしました。

岐阜大学 学長 森脇 久隆

岐阜県産品のさらなるブランド化を図るため
岐阜大学との連携を深め、うまくコラボレーションしていきたい。
岐阜県農業協同組合中央会 会長
ぎふ農業協同組合 代表理事・組合長 櫻井 宏氏
× 岐阜大学 学長 森脇 久隆 4

ものづくりの分野だけでなく観光業とも連携し、
地域経済に寄与する存在であってほしい。
株式会社十八楼 女将 伊藤 知子氏
× 岐阜大学 学長 森脇 久隆 8

岐阜の地場産業にとって最も役立つのは、
開発から事業化まで一緒に取り組んでもらうこと。
株式会社TYK 会長 牛込 進氏
× 岐阜大学 学長 森脇 久隆 12

【表紙左下のイメージ図について】
これは岐阜大学の将来ビジョン(森脇ビジョン)をモデル化してイメージ図にし、地域の中核たる岐阜大学が、人・物・情報を地域社会にもたらし、さらに国際社会とも呼応しつつ、相互に発展していく様子を表したものです。

岐阜大学の将来ビジョン(森脇ビジョン) 【2025年に向けて】

「地域活性化の中核拠点であると同時に、
強み・特色を有する分野において
全国的・国際的な教育・研究拠点の形成」
を目指します。



【特別対談】



櫻井 宏氏 略歴

平成24年6月26日 常務理事より代表理事組合長へ選出
任期は3年 同日付
平成24年7月 JAバンク/JA岐阜信連
経営管理委員会会長
平成27年6月22日 代表理事組合長 再選
平成27年6月30日 JA岐阜中央会新会長に選任

岐阜県農業協同組合
中央会 会長
ぎふ農業協同組合 代表理事・組合長

櫻井 宏氏

岐阜大学 学長

森脇 久隆

岐阜県産品のさらなる
ブランド化を図るため
岐阜大学との連携を深め
うまくコラボレーションしていきたい。

学長: 今までも様々な分野の方にお話を伺ってききましたが、岐阜大学の学部構成を踏まえた上で、ぜひ農業関係の方にもお話をお聞きしたいと思い、今回はJA岐阜中央会の櫻井会長にお時間をいただきました。農業協同組合のJAグループといえば農業分野のみならず、大規模な金融機関という面もありまして、本学からも金融機関志望の学生が数多く就職させていただいているようです。

櫻井会長: 岐阜地区にある金融機関として就職先の選択肢に入れていただいているのは、とてもありがたいことです。ただ、一般の方には金融の側面ばかりが目立ってしまい、国からも「農業分野に力を注ぐべきだ」とのご指摘を受けています。農業協同組合の根底には、事業を総合的にを行い、金融事業の資産を営農の支援に活かすという相互扶助の精神がありますが、最近はこうした農業協同組合本来の理念がなかなかご理解いただけず、いささか歯がゆい思いを抱えているところです。

学長: 現在の日本社会は、アメリカ型の資本主義社会に大きな影響を受けていますから、協同組合の概念が理解されないという側面もあるかもしれませんね。

櫻井会長: これに関しては、私たちの情報発信不足にも原因があると思います。市民の方々に理解



を広げる活動をしないといけないですね。そのためには、前提として農業を発展させるという実績を作らないといけません。幸い岐阜県には、飛騨牛をはじめとしたブランド力のある農畜産物がありますから、まずはこれらのブランドの維持・向上に向けて精力的に取り組んでいるところです。

学長: 岐阜大学でも、岐阜県に立脚する大学として、産学連携や人材育成などを通じてこれまで以上に地域の産業に貢献していきたいと考えています。岐阜県の産業といえば、モノづくりに注目が集まりがちですが、実は構造的には、農業が非常に大きなウエイトを占めています。

櫻井会長: ご指摘の通り、岐阜県は農業がとて盛んで、農産物別の出荷額を見てみても、その大半が全国上位に位置しています。JAぎふでは今年2月に応用生物科学部と協力協定を結んだばかりですが、今後は国が推進する6次産業化のヒントをいただくなど、岐阜大学とうまくコラボレーションができればと考えています。また、大学卒業後に新規就農を目指していただいたり、仮にご自身で直接農業をしない場合でも、ぜひ技術指導などを通じて力を発揮してもらいたいと思っています。

柿の新品種の栽培に着手するほか、
県の後押しを受けて農産物の海外輸出も進行。

学長: 6次産業化による付加価値の創出という点では、岐阜大学でも花卉や柿の品種改良などを手掛けていますが、JAぎふでは、農産物の付加価値を高めるためにどのような取り組みを行って





いらっしゃいますか。

櫻井会長：ブランド価値を高めて差別化を図るために、品種の改良や栽培方法の見直しなどに取り組んでいます。例えば、本巣市の糸貫は富有柿の一大産地ですが、この地域の生産者が集まる「糸貫柿振興会」では、あえて木の本数を減らして栽培し、糖度や大きさを厳選して出荷することで、「マル糸富有柿」というブランドを確立しています。

学長：確かにこの地域を通りかかると、一つひとつ丁寧に袋がけした柿の木をよく目にしますね。そのほかにはどのような取り組みがありますか。

櫻井会長：岐阜県下で最も生産者が多いお米については、食糧管理法が廃止された平成7年以前に比べて単価が半減している現状を踏まえ、温暖化への対応なども加味した新品種や改良品種の導入を県に要望しています。先ほどお話しした柿についても、ナシのような食感でとても甘い「太秋柿」や、鮮やかなオレンジ色をした「早秋柿」などの新品種の栽培に着手しています。

学長：県産品の海外展開についてはいかがでしょうか。

櫻井会長：岐阜県では古田知事が主導する形で海外への売り込みを展開してくれていますので、私たちもこれに乗る形で少しずつ輸出を進めています。富有柿は以前から輸出されていますし、最近では「岐阜えだまめ」のブランドで親しまれて

いる地元の枝豆も海外に出ています。一方で、飛騨牛を見てみると、国内の販売だけでも品不足が生じる状況ですから、生産の根本である繁殖から本腰を入れて手掛けていかないと大規模な輸出は難しいかもしれませんね。

学長：輸出先によっては、国際的な食品の衛生管理方式である「HACCP」が義務化されている国もありますし、飼育の仕方自体を重要視するケースもあるようです。現在、岐阜県と連携して大学構内に建設を進めている「岐阜県中央家畜保健衛生所」がお力になれる部分もありそうですね。

櫻井会長：ありがとうございます。農産物の輸出入については現在、TPPの動向が注目を集めています。数量的にそれほど影響がないとの見方がありますが、個人的には少なからず米価の押し下げ要因になるだろうと予測しています。国全体で見ればプラスマイナスゼロかもしれませんが、地域別には優劣が出てくるはずで、私たちもより付加価値の高い農産物を作らないといけないと危機感を持っています。

多面的な機能を持つ農業を守るためにも、「高大連携」を含めた岐阜大学の人材育成に期待。

学長：近頃は、過疎化が進む中山間地域を中心に「人口定着」の重要性が叫ばれています。人口定着のためには、地域に仕事があり、安心して子育てができ、さらには子どもが成長した時にちゃんとした教育を受けることができる環境が不可欠ですが、多面的な機能を持つ農業は、こうした環境を守る上で非常に大事ではないかと感じています。

櫻井会長：おっしゃる通りです。農業には、自然環境や地域のコミュニティを守るという側面があります。特に中山間地域では、国が推し進めるような大規模化ばかりを進めるのではなく、地域に根ざした「家族農業」を守っていくという視点も必要なのではと思います。

学長：農業を通じて家族が定着すれば、その地域のコミュニティや美しい景観を守ることもつながりますからね。

櫻井会長：そうです。ただ、現実的には中山間地域の耕作放棄地は増え続けています。そこでJA

ぎふでは、岐阜市内の企業に働きかけて社員の方々に過疎地で米作りを始めてもらうなど、消費者側の「援農」によって村や地域を守る取り組みを始めたところですよ。私たちは、農業を体験してもらう活動を「食農教育」と呼んでいます。こうした取り組みを通じて、消費者の方々にもっと食べ物に関する理解を深めてもらわないといけないと考えています。

学長：土に触れるという体験は、子どもたちの教育にも良い効果があるそうですね。私たちの事例を申し上げますと、教育学部が取り組んでいる研究の中に、障害を持つ子どもたちに農業を体験してもらう取り組みがあり、とても良い結果が出ています。この研究は海外からも注目を集め、「農業体験の教育効果を試したい」とタイの先生と子どもたちが岐阜大学を訪れたりしています。

櫻井会長：土に触れるということは、情緒教育にもとてもいい効果があると思います。農業を身近に感じる機会が減っている時代だからこそ、子どもたちの食育にはこれからも力を入れていきたいです。

学長：応用生物科学部でも最近、改めて農業経営の分野に力を入れる必要性を感じているところですが、岐阜大学にどんなことを期待されていますか。

櫻井会長：農家の高齢化や担い手不足が深刻化する中、農業経営というのは私たちが取り組むべき農協改革の本丸であり、経営感覚を持った農家を育てることが使命だと感じています。これからは、岐阜大学を卒業された方に、JAぎふの一員としてコンサルタント業務などを担ってもらえればと思っています。

学長：農家の方々の経営指導をするためには、きちんと生産のことが理解できている人でないといけないでしょうね。

櫻井会長：そうですね。栽培に関して全く知らないというわけにはいきません。一方で、農業高校や農業大学校などでは栽培に関しては熱心に指導されますが、経営の部分まで追いついていない状況がありますので、そのあたりを大学で指導・育成してもらえるとうれしいです。

学長：最近では、大学と農業高校との連携も大事になってきています。県の教育委員会からも「高



大連携」に力を入れるように要請を受けていますし、高校などで農業を学んだ方が大学に進学し、さらに知識に磨きをかけていく流れをもっと作っていききたいですね。

櫻井会長：私もそれが一番いいと思います。農業高校ですと、どちらかと言えば生産の実践が中心です。大学に進学して経営面に磨きをかけるというのが理想的です。

学長：今、岐阜大学では同じような流れで工業高校と工学部との連携が広がってきています。

櫻井会長：そうですか。昔と比べて農業高校からの大学進学率も高くなっているようですし、県下の農業高校から岐阜大学に進学するルートができていくことに私たちも期待しています。

(対談：2016年8月4日)



【特別対談】

ものづくりの分野だけでなく 観光業とも連携し、 地域経済に寄与する存在で あってほしい。

株式会社十八楼 女将
伊藤 知子氏
×
岐阜大学 学長
森脇 久隆



伊藤 知子氏 略歴

平成 9 年 株式会社十八楼入社
平成 15 年 合資会社伊藤産業代表社員を兼務
平成 17 年 長良川温泉若女将会会長に就任
平成 26 年 岐阜大学経営協議会委員に就任

学長：これまでの対談では製造業や金融機関、農業分野の方々にお話を伺ってきましたが、岐阜県は観光業をはじめとしたサービス業も大きなウエイトを占めています。そこで、岐阜市内で老舗旅館を営まれ、150年以上の歴史を持つ「十八楼」の女将・伊藤知子さんにご登場いただき、第三次産業に携わる企業経営者の視点から、岐阜大学に対するご意見を頂戴できればと考えています。

伊藤女将：今回、学長との対談の機会をいただきまして、改めて岐阜大学のホームページを拝見しましたが、先進技術の研究開発に対する熱心な姿勢が伝わってくる反面、製造業の話題が中心で、私たち観光業からはどうしてもハードルが高く見えてしまいました。今後はぜひ、「地域密着の岐阜大学」という立場をより鮮明にし、製造業以外でも地元経済に寄与する存在であってほしいと願っています。

学長：ご指摘いただいた通り、岐阜県には自動車や航空産業などを下支えする企業が多く、工学部との連携が注目されがちです。しかしながら、応用生物科学部ではブランド肉である「飛騨牛」や「奥美濃古地鶏」の生産に深く関わり、花や果物の品種改良にも強みを発揮しています。最近では、サントリーさんから発売された青いバラを共同開発したほか、新たな食感の果宝柿なども生み出しています。

伊藤女将：そうでしたか。今後は岐阜大学の技術から新しい地場産業が増えていきそうですね。ぜひ観光業もこうした産業とリンクさせていきたいです。最近では、他県にはないものづくりの現場を見学する産業観光ツアーなども面白いのではと考えているところですが、いわば観光とは地場産業の総力戦。そこに岐阜大学さんに深く関与していただければ、地元の岐阜県にとって大きなプラスになるだけでなく、岐阜大学さんにもメリットがあるのではと思います。

学長：岐阜大学では現在、揖斐郡と郡上市で空き家対策のモデル事業に取り組んでいますが、移住を促すためには、住む場所を提供するだけでなく、生活基盤となる仕事の創出が大きな課

題だと感じています。そこで揖斐では、良質なワサビが取れることに着目し、JAさんの指導を仰ぎながら新たな産業にできないかと考えています。

伊藤女将：まさしく新しい地場産業の創出ですね。観光に結び付けるにはモノの生産だけでなく、ストーリーや体験型のアレンジも必要です。

学長：そうです。また、揖斐郡にある白山神社には立派な榎の木がありまして、それを観光資源にできないかと期待しています。今まで岐阜大学の研究はものづくりに傾斜しがちでしたが、今後はもっと観光業の視点も取り入れていこうと考えています。



地場産業のイノベーションや

課題解決につながるなど

より実用的かつ

実務的なテーマの研究に期待。

伊藤女将：私たち地元の経営者が岐阜大学に求めているのは、もっと実用的、実務的な観点からのアプローチです。最先端技術の研究も素晴らしいですが、実際の企業が抱える経営的な課題についても研究テーマとし、地場産業のイノベーションや課題解決に寄与していただければと思います。

学長：この点に関しては、これまで対談させていただいた方々も同様のご意見をお持ちだと感

じています。企業経営にとって欠かせないのは、事業体をどのようにマネジメントしていくのかという視点です。現在、学生たちに経営的な視点を学べる仕組みを作れないかと考え、平成32年をめどに企業経営やマネジメントを教育する組織を立ち上げようと動き出しています。

伊藤女将：そうですか。次代の経営を担う子どもたちに、岐阜大学で経営やマネジメントについて学んでもらえるのはうれしい限りです。学生だけでなく社会人でも学べれば更に有難いです。

学長：実際、ある調査によれば、岐阜県内にマネジメントを学べる学部・学科がないことから、県外の大学を志望する高校生が相当数いるようです。そういった方々の学びの場を提供できればと強く感じています。

伊藤女将：中小企業の経営者の立場からすると、後継者を育成するために、ご子息を経営や地域創生が学べる大学に進学させる気持ちはよく理解できます。私自身、専門的に経営を学ぶ機会を得ないまま思いがけず家業を継ぎ、肌感覚を頼りになんとか舵取りをしてきましたから。おもてなしの心は大切ですが、それだけでは企業は存続できません。欧米で浸透しているCS（顧客満足）経営などを学ぶ場があれば、お客様へのサービスの質の向上につながり、観光業にも非常に役立つのではと思います。科学的・工学的アプローチによる改善もサービス業には必須課題です。

**岐阜での就職は、
自己実現にとっても最良の場。
岐阜大学と手を携え、
もっとこの地の魅力を伝えたい。**

学長：十八楼さんは、岐阜市を代表する老舗旅館ですが、最近はいぶん変化してきているようにもお見受けします。

伊藤女将：ええ。157年の歴史がある当館ですが、守るべきものは守る一方、時代にあわせて変えるべきところは変えています。岐阜大学の学生さんにもこうした実情を知っていただ

ければ、旅館業に対するイメージもだいぶ変わるのではないのでしょうか。

学長：そうだと思います。ちなみに最近では、発達障がいなどのハンディキャップを抱えた方を積極的に採用されているとお聞きしています。

伊藤女将：過去の採用事例からも、たとえコミュニケーションに問題があったとしても、きちんとしたトレーニングさえ積めば、立派な人材として活躍してくれると確信しています。

学長：岐阜大学でも約7200人いる学生のうち、



何らかの障がいを抱えた人が8%います（平成28年5月現在）。発達障がいの方は18人いますが、ものすごい能力を秘めた方たちばかりです。そのままでは就職が難しい場合でも、就労に向けた支援プログラムなどを受けてもらうことで、才能を開花させることができるはずです。

伊藤女将：知的障がいであれば周囲も気付きやすいですが、発達障がいですと、学業が優秀であるが故に隠れてしまうこともあります。そういった方にこそ、地元企業に就職して特性を活かしてほしいです。また、最近では、旅館業に携わりたいという中国人の方にもご入社いただいています。短期大学の学生時代にお茶や着物などの日本文化を学んでおられ、英語

も日本語も堪能です。

学長：学生たちはどうしても大都市の上場企業に目を向けがちですが、実は大企業で生き残るためには熾烈な競争がありますし、大都市の企業と地域の企業では、福利厚生などの待遇面も差はなくなりつつあります。そのため近頃は、住み慣れた出身地で就職し、自分の好きなことをやりたいという考えを持った学生も増えてきています。

伊藤女将：確かに、大都市の企業を選ぶのでは



なく、自分の故郷で自己実現を目指すという方向へとマインドがシフトしてきている気がします。当館でも、日本を代表するような有名企業で活躍された方が、「旅館で働きたい」「岐阜に関わりたい」と中途採用に応募されるケースが目立ってきました。一定の社会人経験を経て改めて自分が本当にやりたい事や故郷の良さに気付いた側面もあるかと思いますが、できれば岐阜県出身の学生さんたちには、岐阜大学で学んでいる間に、故郷である岐阜にこそ自己実現できるステージがあることに気付いていただきたいです。

学長：本当にその通りです。卒業後3年以内に離職してしまう学生が3割近くにのぼるという

データもあり、ミスマッチが起こる前になんとかうまく導いてあげたいと思います。

伊藤女将：私は3人の子どもを育てながら仕事をしていますが、その点でも岐阜で仕事できてよかったと痛感します。大都市で3人を育てながら仕事を続けるのは難しいです。とりわけ岐阜に実家を持つ女性には、地元就職をおすすめしたいですね。仕事と育児の両立に悩む方は本当に多いと思います。例えば岐阜大学でも、身近な先生方がどのように育児と両立させているかを体験談としてお伝えすれば、学生たちにとって今後の糧になるのではないのでしょうか。

学長：そうですね。女将のようなロールモデルを見せてあげる必要がありそうです。学内でも女性の研究者が増えてきていますから、若い学生たちをリードしてもらうことが大事ですね。

伊藤女将：あとはせっかくですから、岐阜大学で過ごしている間に、もっと岐阜の観光の魅力を体感してもらいたいと願っています。他県から通学されている方ですと、どうしても駅と大学の間をバスで往復するだけになりがちです。先日ご来館されたお客様も、「岐阜大学の卒業生ですが、今まで一度も観光客の目線で岐阜をみたことがなかった。」とおっしゃっていました。私たち観光業のPR不足も大きな原因だとは思いますが、岐阜大学でも岐阜のまちの魅力をアピールする機会を作っていただければうれしいです。

（対談：2017年1月24日）



【特別対談】

岐阜の地場産業にとって 最も役立つのは 開発から事業化まで一緒に 取り組んでもらうこと。



株式会社TYK 会長

牛込 進氏

岐阜大学 学長

森脇 久隆

牛込 進氏 略歴

1958年（昭和33年）名古屋工業大学窯業工学科卒業、東京窯業（現TYK）入社。67年米国コロンビア大学大学院修了、MBA取得。

TYK取締役、専務、社長を経て、2005年から現職。岐阜県経営者協会会長、岐阜県工業会会長を歴任。多治見商工会議所会頭はじめ公職多数。多治見出身。



学長: 私ども岐阜大学では、最近の教育行政の変化を受け、岐阜県に軸足を置いて地域活性化の中核を担うのと同時に、国際競争力を持った特色のある専門分野を伸ばしていくという方針で運営を行っております。今回は、以前から岐阜大学の運営についてご助言をいただいている牛込会長の目から、改めて率直なご意見を頂戴できればと考えております。

牛込会長: 岐阜大学は民間企業にとっても協力的だと感じています。私たちのような地場産業を取り巻く環境は非常に厳しいものがあり、今までの延長線上の努力だけでは状況を打開するのは難しい。何か新たな取り組みをしないといけない重要な局面にあります。そこで、岐阜大学にもより一層のお手伝いをしていただければと切に願っております。

学長: 私たちも岐阜に立地する大学として、地場産業や農業のお役に立ちたいと常に考えています。とりわけ岐阜大学は、ものづくりの中でも金型や土木、エネルギーなどの分野に強みを持っておりますし、農業では果物や花の品種改良などで実績を上げています。これらの分野では徐々にお役に立てるようになってきていると感じる一方で、一つの技術を開発して成果を上げるまでには5〜10年の長い歳月を要してしまうため、なかなか思うように進まないというジレンマも抱えています。

牛込会長: そうでしょう。私たちの研究開発でも、長いものでは30年以上かかることもあります。

学長: 会長はご自身の著書の中で、大学の研究開発において最終的に事業化できるものは、100個のうち5個もあればいい方だとおっしゃっておりますね。最近では私たちも、単に研究開発を行うだけでなく、企業と一緒に事業化まで取り組んでいくことが大切だと痛切に感じています。

牛込会長: その点については私なりに持論がございます。研究開発と事業化との間にあるギャップを「死の谷」と呼ぶように、事業化するまでには多大なエネルギーが必要です。これを乗り越える方法は一つしかありません。ニーズを掴むためにお客様のものとへ足繁く通うことです。おそらく大学ではなかなかできないことですが、こういった観点から企業のバックアップをしていただけると、また違った結果が出てくるのではないのでしょうか。

学長: 私たちも遅まきながらその点に気が付いてまいりまして、研究開発した技術をどのように事業化していけばいいのかを学ぼうと、新たな取り組みを始めております。大学では研究自体に没頭するあまり、「社会から要求されているか」という視点がおろそかになりがちです。そこで今、民間企業でご活躍されている方をお招きし、成功体験などを語っていただくコースを設けよう準備を進めています。

牛込会長: それはとてもいいことですね。民間企業の技術畑で成功した先輩の話を聞けば、参考になることが相当多いと思います。

これからの時代、
国際感覚を身に付けることが必須。
海外での経験は、独立心を養うことに繋がる

学長: 今、全国の大学では、留学に来る外国人と留学に行く日本人学生の数に大きな差が出てきています。岐阜大学でも、研究者を含めて年間約600人の外国人が訪れていますが、一方で海外留学をする学生は100人ほどしかいません。留学経験をお持ちの会長は、こうした状況についてどう感じておられますか。

牛込会長: 私たちの世代は、むしろ海外に行きたくて仕方がありませんでした。私はなんとか機会を作り、30歳でコロンビア大学に留学して2年間学びましたが、今の学生さんは海外に行きたがらないのですか。

学長: 渡航費を支援する基金も用意しているのですが、なかなか手を挙げる学生がいません。

牛込会長: それは残念です。弊社では、毎年夏頃にフランス人留学生を受け入れています。彼らは非常に意欲的で、その後も3回、4回と日本に来ているうちに、「日本で仕事がしたい」と言い始める人もいます。

学長: 外国人から見た場合、まだ日本は魅力のある国ようですね。例えば、インド工科大学から受け入れる留学生は、10名の定員に対して100名ほどの応募があります。しかも100点満点中、95点以上の成績を取っている学生ばかりです。



それだけ優秀な人たちが「ぜひ日本に来たい」と言っています。

牛込会長: やはりそうですか。ちなみに弊社では、海外からの受け入れだけでなく、日本人の英語習得にも力を入れています。係長への昇格に英語は必須ですし、部長職以上の社員の9割超が海外駐在経験者です。

学長: やはり海外に行く前と後ではだいぶ違いますか。

牛込会長: 相当変わります。何より独立心が養われますね。岐阜大学の学生さんにも、弊社のアメリカやイギリスの工場へインターンシップにぜひ来て欲しいです。もっとも、最低3週間程度は滞在しないと勉強にはならないと思いますがね。

学長: ちなみに会長がコロンビア大学に行かれたのは1960年代だそうですが、何かきっかけで留学をご決断されたのですか。

牛込会長: 中学生時代からアメリカの学生と文通をしていたのがきっかけでした。向こうから本や絵はがきを送ってくれるのですが、日本との違いに驚いたものです。当時は経済的にも文化的にも大きな差があり、アメリカが一番輝いていた時代です。留学先のコロンビア大学では、周囲の学生たちがアメリカ国内ではなく、世界という観点で物事を論じているのを知り、スケールの違いを痛感しました。勉強は大変でしたが、本当に楽しい2年間でした。この時の経験から、本を読んで勉強する習慣が今でも染みついています。

岐阜のもののづくりの伝統を守るためにも、
ぜひ地元企業へのインターンシップの充実を。

牛込会長: 私は名古屋工業大学を卒業後、大学の後輩を勧誘し、まだ小さかった自身の会社に入社してもらいました。これと同じように、もし岐阜大学を卒業された方が会社を運営されているなら、そこに学生さんを派遣してはどうでしょう。私は「技能」と「工学」には大きな違いがあると思っています。「技能」ではあまり発展性はありませんが、「工学」を学んだ人は応用が利き、発展性があります。中小企業では、国立大学の出身者はなかなか採用できませんから、そこに「工

学」を学んだ岐阜大学の方が入るとなれば、会社の雰囲気も一気に変わるはずです。

学長: 先日、岐阜大学の職員が牛込会長をお尋ねした際には、「ドイツが衰退し始めている」とお聞きしたそうですが、これも発展性を持った優秀なエンジニアが不足しているからでしょうか。

牛込会長: そうだと思います。かつてのドイツには、親子三代で同じ企業に勤めているエンジニアがたくさんいました。こういう人たちは、自分の会社という意識が強く、仕事に向かう意気込みが違うわけです。最近ではM&Aなどが盛んに行われ、自分の会社という意識が薄れてしまっている。これこそがドイツの勢いに陰りが見え始めている一因だと見ています。

学長: 日本はまだこうした伝統が残っていますよね。例えば、建設機械などで有名な石川県的小松製作所では、街そのものが小松製作所の街であり、孫の代まで勤めている社員も多いとお聞きします。

牛込会長: 私は、地域とそうした繋がりがある企業こそ、技術継承がうまくいき、強固な経営体質を維持していけると思います。近頃は日本もドイツと同じような流れを辿っている感じがして大変憂慮しています。

学長: 日本では今、ドイツのマイスター制度のように技術を重視した人材育成を考えているようですが、企業内で技術を継承していく流れが途絶えてしまえば、人材育成だけをしても間に合わないかもしれません。

牛込会長: だからこそ岐阜大学には、県内の魅力ある企業を深く知るためのインターンシップを強化していただきたいです。

学長: 現在のインターンシップは3、4日で終わりというケースが主流のようですが、やはり短いでしょうか。

牛込会長: とても短いですね。やはり最低3週間はないと、仕事の本質は理解できません。弊社にも岐阜大学出身の社員がいますから、機会があれば学生さんたちに向けてお話をさせてもらうのも面白いと思います。夢中になって仕事に取り組んでいる先輩の話聞けば、きっと良い刺激になるはずですから。



学長: ぜひお願いしたいと思います。ご自身の知識と技術で、仕事の険しさを乗り越え、成功に近づいていく。学生たちにそんな一連のストーリーをお教えいただければとてもありがたいです。

牛込会長: 私は、創造性というのは生まれつきのものではなく、挑戦して乗り越えた時にこそ醸成されるものだと思います。また、仕事をする上では「誠実さ」「勤勉さ」が大事です。インターンシップや先輩からの話を通じて、仕事と向き合う上での心構えや、何かを成し遂げた時の達成感などを少しでも感じ取ってもらえれば望外の喜びです。

(対談：2017年2月13日)





大学北から岐阜大学キャンパスを望む
石谷山（中腹）より撮影
岐阜大学名誉教授 若井 和憲



国立大学法人

岐阜大学

「対談集」について

岐阜大学では、大学の運営に活かすため、学長と外部有識者との対談を行っています。対談の様子は大学ホームページに掲載しておりますが、大学広報誌「岐大のいぶき」特別号として取りまとめ、発行いたしましたのでご覧ください。（岐阜大学広報企画室）

岐大のいぶきは Web からご覧いただけます！

<http://www.gifu-u.ac.jp/about/publication/publications/ibuki.html>



■「岐大のいぶき」についてのご意見ご感想をお待ちしております。

送付先 / 岐阜大学総合企画部総務課広報室広報係 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1
TEL 058-293-2009 FAX 058-293-2021 Email kohositu@gifu-u.ac.jp